

□ 書評 □

上田礼子(著)

「生涯人間発達学」

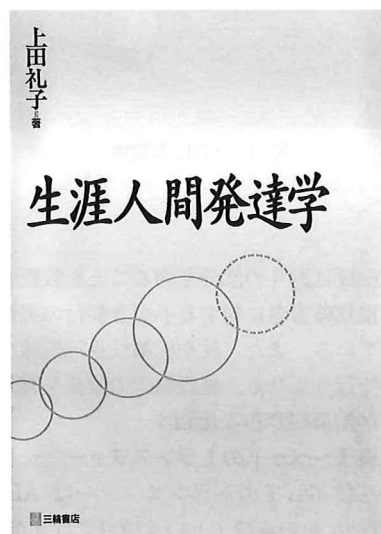
今川忠男

(旭川児童院)

本書は、従来の発達学が乳幼児から成人に至るまでの過程をとらえていたのに対し、生命誕生から死に至るまでの変化を発達として見ていく必要性を説いた本邦初の生涯発達学の教科書である。すでに欧米では、“Across the Life Span” というシリーズで様々な機能の発達を人間の生涯にわたる経過で解説した書籍が出版され、理学療法上の教育、臨床、研究に引用されている。本書をきっかけとして、わが国でも理学療法関連機能の生涯発達学の確立と発展を期待したい。

総論と各論7章からの構成で保健医療専門職、学生を対象とした教科書を目的として執筆されている。これを現在の理学療法学科学生の「人間発達学」教科書として検討してみると、総論の第2節、第4節は人間に対する全体的かつ包括的視野の獲得という教科目的に適した内容であると感じる。特に第4節の「発達と発育」に紹介されている Portman や Home の説明、また家庭—社会—文化—歴史的環境における個体発達過程の把握で有名な Bronfenbrenner の主張などは、書評者も「障害児・者のための人間発達学」の中で講義してきた経緯があり、意を強くしている。

各論の第1章「出生前発達と出生」は臨床小児理学療法士にとっても十分な内容である。第4章の一部と第5章から第7章が既存の発達学に加えて、近年急速に関心が高まり、実証的成果が報告されている分野で



ある。本書はこれらを網羅することで小児理学療法士を目指す学生や臨床家のための特別な専門科目として考えられていた「人間発達学」を、生涯をもって生きていく人間を対象とする理学療法士の共通基本学問として再認識させてくれるのではないかと期待している。

臨床家には本書の「発達理論」に最近の運動制御・学習理論を加味する必要があるが、理学療法計画の優先課題意志決定や前方視的展望のための参考書として推薦できる。

(B5, 256頁, 定価3,900円/税込, 送料340円, 三輪書店・刊)